人とのつながりと防災

鈴木千晶

一月十七日朝五時四六分私はまだ産れてません。

その時は、お母さんが17才で、震災の一年後、私が生れました。私が震災の話を聞くと、お母さんは、下をうつむきます。やっと話してくれたのは、私が四年生の時です。

「ドーン。ガタガタガタ。」

家が急にゆれだしました。お母さんは、おなかに、私をかかえていたので、動けません。

お父さんはその時、実家に帰っていました。だからお母さんは、必死におなかをかかえて、ふとんにもぐりました。お母さんも、その時は実家にいて、おばあちゃん、おじいちゃんと話をしていました。その時、震災がおきたのです。

お母さんは、タンスの下じきになりました。その時は、おじいちゃんが助けてくれたそうです。

ガラスがこらいゅうに飛びちっていたそうです。

岸本くるみさんの最後のお話では、とても感動しました。

「守りたい気持ちがあるから防災。」

これは、なるほど、守りたいから防災する。なるほど。と思いました。そして、「自分と大切な人やものを守りたいという気持ち。」私は、自分の大切なものは、なんだろう。少し迷いました。そして私は、大切なものがやっと分かりました。それは、お母さん、犬、家族、友達だと分かりました。

これからは、てきぱき行動して、たくさんの人を助けたいです。

鈴木 千晶

アピカ 20×20